

蒼天

安田貴広

*

「小晴こはるってさ、実は目つき悪いよねえー。」

昼休み、ランチメイトの一人が満面の笑みで私に言った。他数名が、なにやら目配せしながらクスクスと笑う。ああ、ついに始まったと思った。どうでもいい話題でヒステリックにはしやぐクラスメイト達の喚声を背中に浴びながら、私は自分と他のランチメイト達の机の間に約3センチの隙間を見つけた。物もの憂い雲が空に敷き詰められた、新年度5日目のことだった。

次の日から私は学校に行くことをやめた。新しいクラスでもまた泥仕合どろじあいが始まるのかと思うと、なんだかこうふつつりと、突然に緊張の糸が切れてしまったのだ。

高校に入学してから1年以上が経った今も、私たちは相変わらず幼稚なままだ。クラス内には暗黙のヒエラルキーが敷かれており、私を含めた大多数は日常に、階級争いいそに勤しんでいる。媚び、陰口、そして無視。去年の夏から“空気”になっていた上山さんの糸も春休みの間に切れてしまったようで、新年度になってから彼女の姿を見た者は居ない。

トイレの鏡に向かって、「バカバカしい…。」なんて、古い映画のワンシーンみたいに呟いたりしてみたこともあったが、「だったらお前はなんでそんなに必死で『一軍』にしがみつい

ているんだ。」と、これも古い映画みたいに鏡の向こうからツッコミが入った。結局私には、その競争を放棄してまで学校に通い続ける気概がないだけなのだ。

私の唯一の共同生活者である母は、毎日私が目覚める前に出勤し、帰宅は夜の8時過ぎ。娘が学校に行っていないことになど絶対に気づかない。私は部屋の中で、母が作ったお弁当を罪悪感と共に胃の中に押し込み、何年も前に買った漫画や小説を読み返し、少しでも眠くなったら寝るといふ生活を開始した。無断欠席について、来るかもしれないなど思っていた担任の松本先生からの電話は意外にも無く、安心と同時になぜか失望している自分の滑稽さに笑った。

いい加減することが無くなってきたので、ベッドにダイブして言うてみた。

「さあて、どうしたもんでしょうか。」

：おどけてみても、もちろん全然楽しくはない。観念して枕の横の携帯を手にとった。受信ボックスを開く。

昨夜深夜0時、奇妙な間違いメールが届いていた。

『大丈夫。雲の上はいつでも青空だから。』

……なんだこれ。いったい何がどう大丈夫なのか。第一間違いメールだとしても、誰が、誰に、どんな経緯で、こんなドラマチックゼリフを言うだろうか。はっきり言って気持ちが悪いくいつもの私であれば、速攻で受信拒否設定にするに決まっている。決まっているのだが：このメールの最後に記されている名

前が、私にそれをさせなかった。

『優貴』。私の初恋相手の名前だ。

つしや！私はむくりと起き上がり、ついに返事を書いた。

「すみません、誰ですか？」

すぐに返事が来た。

「知ってるくせに。」

…おお、強気な返事なこと。

「優貴っていう名前の人はきつといっぱいいる、と思う。」

「青空大好き、優貴です。」

——やばい。どうしよう。

*

優貴は体が大きくて活発で、すごくハンサムというわけではないけれど、とても存在感のある子だった。いつもクラスの中心は彼だった。2年生のクラス替えの直後、同じクラスになっていた優貴は、私の学校生活を一変させた。

当時の私は社交スキル0で、端的に言つて、馬鹿にされていた。みんなは私が嫌いで、だから私もみんなが嫌いだった。男子から話しかけられることなど当然皆無だった私に、隣に座っていた優貴は授業中に自分のノートに質問を書いて見せてくるという手法で語りかけてきた。

「晴れと曇りと雨、どれが好き？」

私は心の中で「なんだこの人？」と呟いた。からかわれているのだろうか。けれどその後すぐに、自分の心臓が思いの外高ほか

鳴っているのに気づいて動揺した。

「雨」

………ああ、なぜそんな意味の無い嘘を！晴れが好きだと言うとありきたりでつまらない人間だと思われろのではないかと考えて雨と答える人間のほうがよっぽどつまらないしそもそも本当は男子に質問なんかされてめちやくちや嬉しいくせに「なんだこの人？」などとクールぶっている中2女子は世界痛々しさランキングの最低でも5位以内にはランクイン……と、私が脳内で勝手に悶絶していると彼が再び書き込んだ。

「やっぱり。」

こちらを見て微笑んだ。

「おれも、晴れが一番好き。」

——それはもう、文句のつけようが無いくらいに格好良かった。

確実に赤面しているであろう自分の顔を見られたくなくて、私は彼の顔を直視することすらままならなかった。心を見透かされた。初めて体験する感覚だった。

それから席替えまでの間、私たちは筆談に没頭した。例えばそれはこんなやりとりだった。

「小晴は兄弟いるの？」

「いない。優貴君は？」

「おれは一コ下の弟が一人。」

「そうなんだ。いいね。」

「そう？でもまあ、年近いわりに仲いいって言われるかな。」

「普通、年近いと仲悪いもんなの？」

「おれの勝手なイメージだけど笑」

「ふーん。」

私はやはり感情を表に出すことは苦手だったが、彼はそれを全く意に介していない様子で、それがとてもありがたかった。そんな私もある日、どうしても気になっていたことを思い切っ
って聞いてみた。

「優貴君は、なんで私に話しかけてきたの？」
はたとこちらを見た。コンマ1秒、目が合った。

「うーん、クラスで一番、何考えてるかわかりやすかったから。」

——！

それまで、自分の気持ちに他人に知られることほど恐ろしい事は無かった。くだらない、浅ましい人間だと思われのは絶対に避けたかった。なのに何故かそのとき、私は確かに嬉しかった。

私もこの人のことをもっと知りたいと思った瞬間だった。

「優貴君は、将来やりたいこととか、あるの？」

「うーん：ちよっと待って。考えるから。」

しばらく間が空いた。なにやら真剣に考えている様子だった。そしてやがてゆっくりと書き始めた。

「うちさあ、鳥飼ってるんだよね。」

あまりの唐突さにしばらく固まってしまった私だったが、続きを顎で促した。

「あいつみたいに空飛べる仕事っていったら、やっぱり飛行機に乗るしかないかな。」

高校に上がる直前には、母が携帯電話を買ってくれた。その

頃には私にも、携帯を手に入れたら連絡先を交換しようと言いつ合える相手ができていた。優貴のおかげである。二年前までは想像もしていなかったことだ。

優貴とは同じ高校に通うことが決まっていた。二人とも無事に合格したことを知ったあの日の喜びを、私は一生忘れないと思う。

しかし、待ちに待った入学式に、優貴はいなかった。次の日も、その次の日も、優貴は学校に来なかった。中学時代の同級生に聞いてみても、誰も理由を知らなかった。手紙を送った。もちろん、携帯番号とメールアドレスを書いた。

優貴からの連絡は、来なかった。

*

この続きは、フルアルバム『蒼と群青』のブックレットに掲載されています。